

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

| | |
|------------|---|
| Title | 嘘の犠牲 |
| Author(s) | 福永, 豊治 |
| Citation | 龍南, 185: 67-76 |
| Issue date | 1923-03 |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| URL | http://hdl.handle.net/2298/8615 |
| Right | |

嘘の犠牲

福 永 豊 治

い、つ、き、り、と薄紫に温泉岳が空に浮んでゐた冬休みの某日私とKはM港近くの海岸道を歩いてゐた。小春日の陽で汗が出さうであつた。

久しく、中學卒業以來會はなかつたKは私よりずっと老けて見えた、勿論、都會の學校にいつてゐる所爲もあつたらうが。彼の額に、不圖、私は大きな傷跡を見付けた。私にはその傷の因縁が生徒私にも忘れ得ぬ災害の折、Kに出来たことは充分判りきつてゐるのだが、久し振りに會つてその傷を見せつけられると、戰慄する位の過去の恐ろさが又泌々と蘇つてきたのだつた。

『おい、Kあの時は恐ろしかつたなあ、君の額がまた思ひ出させたよ』思はず僕が口にするにするとKは『あの頃までは、何とも思はなかつたがね、……此頃髪を延べて見て朝夕鏡を見てゐると、男でも矢張り顔の傷が氣になつてね實際悲觀する、つまらない嘘の犠牲さ、……』と云つて妙に悄氣て仕舞つた。私は嘘の犠牲と云ふのがわからなかつたので、聞いて見たらKは私にも意外なことを持出した。語らうとするには私は先づ其當時のことから記さねばならん。

中學三年の時、春休みに、Kと私と他三人都合五人で、私の家から程遠からぬ険しい山を越えてKの親類に行つたことがあつた。往復十里位の道で、めい／＼腰辨當をさげて朝早く家を出たのだ。用事はKの親類の家にやつてあるKの犬を取りに行く事だつた。今でもKは大の犬好きで態々その下宿に犬を養つてゐる位の犬公方様だが、その時Kは氣狂の様に犬好きであつたらしい、よく彼の姉が僕の母に『宅のは寢床にまで犬を引張りこむので……』と思痴をこぼしてゐたのを記憶する。何さぞ、春休みになつて町の中學の寄宿舎から、歸つて見ると大事にしてゐた。ピースとか云つた彼の犬が親類においてあると聞いて、Kはたまらなくなつて、嫌がつた私共を共に連れ出したのだつた。五人の中で、Kと私とが最年長で他の三人は、中學一年生だつた。春の山であるし、櫻の花を帽子につけたり、枝をきつてステッキに造つたりしてやつと親類の家までゆきつき黃粉餅を馳走されたりして、歸りかゝつたのは夕暮だつたらう。私達が歸途の遠いのに、うんざりしてゐたのに反し犬をつれたKの元氣の好さつてなかつた。丁度山越えしようとする時すぐ足許の有明海に、温泉岳にかくれかゝつた夕陽が反射して美しいこと五人も疲勞れてはゐるし、一寸休むことにした。そうして悪い事だが盗み出した、きんこうじや、夏蜜柑を食ひ出して、ふざけちらしたりした。朝、登りかけ咽が乾いて仕様が無かつたので、一寸、ある山中の百姓家に行つて蜜柑でも買はうと思つて寄つて見たら家人が不在で縁側の下に、杉の葉なんかかませて眺む向きの奴が轉がつてゐたので、盗み出して仕舞つたのだつた。そうこうしてゐる間に、寒い風は吹く、ひもじくはなる。野火を仕様とKの發起で私が偶然もつてゐたマツチでKは枯草に火を點けたのだ。それがそもぐの過失だつた。

丁度、私達は海が眼下に見ゆる様な、その山の中腹にゐたので、遠慮なしに吹きあげる海風が一寸の火を吹き捲くつて、茫然としてゐる間には消ゆるさうもない位だつた。五人の者が一應は羽織、まんと等で消して見たのだが、眉毛も脛毛も焦げて仕舞ひさうで、暫くの後には仕方なしに遙か向ふの薄暗い栗林の中を這ふ様にして擴がつてゐる火の手を氣味惡げに見乍ら、吾ともなしに皆一所に集つて仕舞つた。各々、煙の立つ衣類を手にして、泣いてゐるのは今から思ふと笑止千萬であり、且又純ない子供心の時だつたわいと懐しい。眼下の海の漁船を盗んで、朝鮮に逃がれやうと途法もないヒーロイズムを主張する餓鬼大將もあれば、そつと逃げ出したら譯はないと云ふ、物知り屋の成り損ひもゐるし、議論まぢくだつた。もう、火をつけて一時間以上になつたらう。すつかり暗くなつて、恐ろしい位靜かな山を——と音たてて、のたくりまはる火の手を五人は茫つとなつて自失して眺めてゐた。

最年長者で、且つ當日の責任者である可きKの發議で、Kと犬は山に留まり、私達四人は、二里麓の村へ知らせに行くことになつたのは、可成それから後だつた。Kが山に留まることは、不安だつたが、足を痛めてゐる彼を連れて行くのは駄目だつた。

私達は、夢中で駆下りて二時間位かゝつて村につき直ぐ駐在所へ知らせた。太鼓が鳴り、青年が集り、私達先導で引返して現場へ戻つたら、既に、他村の人たちが半ば消してゐた。その時、ある村の人が、『Kは焼死んだよ』と云つたので、私達は、びつくりして物も言へなかつた。煙のくすばる松林の中で成程十人計りの村の人がKを取圍んでゐる様子、肩越しにのぞくとKは、焼けた着物に包まれて、額からは血を流して倒れてゐる。そして犬が又死んでゐる。忠犬、主に死す……、私は眞實Kも犬も煙に

捲込まれて死んだんだと思つてわつと泣き出した。他の三人も泣き出した。村人の手でKは戸板で、百姓家に擔ぎこまれた。蘇生はしたものゝ、大火傷で私は氣の毒で何だか濟まん氣がして泣いて許りゐた。醫者が來て大丈夫と云つたまでは、氣が氣でなかつた。便所にゐくのに縁を通つたとき氣がついた事はこの家は、僕達から密柑を盜まれた家だつたことである、悪いことは出來ぬ、恐い事だと私はその時痛感した。村人が早馬で私達の町に知らせたとかで、町内の人々が十四、五人醫者をつれてくる、小林區の役人が巡查と共にくる様な騒ぎの中に、私達はうん／＼唸つて寝てゐるKの傍で、小さくなつて神妙にしてゐた。後になつて氣分のよくなつたKの話しによれば、Kは私共が山を駈け下りた後、しばらくはその位置にゐたさうだ、犬も恐がつてふる／＼ふるゐてゐた。然しそれから下の方に擴がつた火の煙りを海風が、どん／＼Kに吹きつけ、堪らなくなつて、ずつと上の可成り大きな松（多分、一本松で他は雜木の灌木だつたと記憶する）のどこかに行つた、その時、火を見て村人が消しにきてKの方に近寄つて來たさうな。わい／＼しやべつて、口々に『さつきの四、五人の子供達の惡戯に違ひね、見つけたら打殺す目に遇はして懲らしてやる』と言つてゐるので、Kは、恐ろしくなつて、その松の根本に生ゐてゐた一叢の茅の中にかくれてゐたさうだ。大体、火事のある時は、きつと風の立つ者だが、その山の下は海とじてゐる様な格好の場所、轟々と凄しい位、風が吹き捻くつてゐて、Kの所まで火が這ひ上つて來て茅に移つたと。犬も可愛想だつたが、自分が危くなつたので、一生懸命に松にのぼつたさうだ。まだKは見つからない村人達もゐるのだが、人数は少し、燃ゐてゐる現場を消したとて駄目と見たが、ずつと上の方が燃ゐてゐない所に行つて、木を伐り倒し始めたさうだ。獨り、松の上でどこまで

燃わて行くやら、そして後はどうなるかと心配して、火の手を見てゐた時の氣持は……とKは話の
 きれるとよく述懐した。松の青葉は燦る間は長いが火のつき始めたら、仕様のない位燃わ出すさうだ。
 Kの松も、根許の葎茅から吹きつける火焰のため、暫らくは、ぷす／＼云つてゐたが、一度に、あつと
 云ふ暇もなく火がついたので、Kも堪らなくなつて梢へ／＼と登つてゐたら、大きい松でないので、活
 動の活劇よろしく、枝が折れて、もんどりうつてKは根許の火の海に落ちたさうだ。その時根許の岩に
 額を割つたのだ、犬はKの後を慕つて樹上の主をわん／＼もごかしさうに吠わてゐたが、あたりが火の
 海と化した／＼め、成佛して仕舞つた。

その後、町では警察から呼出され、親達の盡力で罰は無かつたが、大目玉を食ひ、損害は親達が出して
 示談となつて事は済んだが、新聞に書かれた／＼め、間の悪さといつたら無かつた。四月まだ癒えないK
 と共に中學に出たら、禁足×日を改めて頂戴した。

× × × × ×

時は、噂を新しい者にのみ追ひ求める。私達の失敗も人々の記憶から遠ざかつて行つた。Kの話も、事
 實としてよく勇敢に獨り残つた者だと人々の稱賛まで得て、悪い印象は決して人々には残さなかつた。
 Kは磯浪を物珍らしげに見つめて言つた。『今まで、松から落ちた事、岩に額をうつて、村人から探し
 出されるまで悶絶してゐたこと等は事實だと人々も、君までも信じてゐるのぢやがありや嘘だ。責任上
 拵らねばならなかつた嘘だ、松の木登りまでは事實として、枝が折れて落ちて以下は嘘になる……』
 Kは暫らく黙つて又續けた。『ね君、犬がさ、煙にまかれて苦がつて、俺に下りよと云はんばかりに變

な斷末魔の聲を上げてゐるをきいて、俺は堪らなくなつて、今までは、生きやうくと努めてゐたのが、どうでもなれどやけくそになつたんだ。下りて見やうと思つてね、帶を枝の端に結んだがね、それを傳ひ下り様としたんだ。處が、運悪くすぽつと帶が解けて、火の中に轉がつたんだ。そう燃ゐてゐなかつた。しかし犬は窒息しかけてゐる、毛も焦げてゐる、僕が抱きあげたら、尾を振つて、僕の顔をなめてね、水が欲しさうな顔だつた。『水の欲しさうな犬の顔つて、どんなものだ』と皮肉な僕の問にも、それでもKは眞面目に、妙に沈んで云つた。『そりや、死生の間際は同じ生物である以上、表情は言葉以上の力をもつからだ。火が吹きつけてね犬が苦しむから、僕はしやつ一枚になつて、燃ゐ残りの着物を脱いでぶすぶすくすばり燃ゐる芝の火を一部消して犬をまいてね、靜かに下ろしたんだ。犬は僕が下りたのに安心したかそのまゝ死んだよ。ね君、茅なんかもそう深かないんだが、思ひ出した様に、風が立つと火の粉を僕のしやつ一枚の（それすらも焼け穿けてゐるのだつたが）身体に吹きつけるだらう。生地獄だつた、苦しかつたからね、それに火の中から、何處まで燃ゐてゐたか見て見ると、恐ろしい位、擴がつてゐるだらう。その日の遠足の發企人も俺、火をつけたのも俺で、このまゝゐては後はどんな目に遇ふだらうと色々に考へ出すと、恐ろしくなつたんだ。自分の苦しい立場を果す爲めには、焼死が一番いいんだ。人は死者に責めは問ふまい、では死んじまふか？ けど君、その位のことで命は棄てたくなかつたんだ。命を完うするためにはどんな手段を取つたがいゝか、どうすれば、他人の峻烈な非難の鋒先を曲げらるかど考へたんだ。それは、傷を負ふて氣絶するか、氣絶を装ふて、その上、僕の最初の發見者をして『まあ焼け死んで、可愛い想に』と言はしめるのが一番適切な手段だと思ひ付いたんだ。可愛い想

に！といふ人は次に、焼死者の生前の華々しい防火の奮闘を思ひ出し、引ひて責任を命に懸けて果すといふ美しい行動に對する稱賛は放火人なる憎惡の念を消すに充分なんだ。その焼死者がもし、息を吹きかへし、何よりも先きに、村人に『火は消したか……』と聞くと思へば、村人は怒りを消してその男を介抱するに躊躇しないだらう……僕は死生の際とてこのトリックを直ちに實行にかゝつたんだ……』

Kと私は歩くのを止めて岩に腰を下してゐる。彼は既に興奮してゐる、犬の死を思ひ出したのか、彼の目は潤はつてゐる、主の傍を離れ切れずに死んだ犬の死骸を前に、その場合に必要だつたこの芝居を、山の巖やかな沈黙の前に暗闇に閃めく遠火を眺めて演じたK、可愛いK、私は彼を漁師達がゐなかつたら抱き締めたであらう。彼は續けた。彼の眼は輝いた。『僕はまづ、格好な岩を探しました。火でさはる事も出来ん位熱くなつてゐた。額を成可く損じない様にと念じて、思ひ切つてぶつゝけた。たら／＼と血が目に入つて泌み出した。犬の死屍を掴へた、頭が／＼鳴つたかと思ふと氣が遠くなりかけた。君、僕はその時思つたよ』こりや、あまりひどくぶつゝけ過ぎた、脳震蕩とやらで、死ぬるんぢやないだらうか』と。勿論、そう考へる余裕がある位だから大丈夫だつたんだ……うまく遣つたよ君。

丁度村人が火を消して仕舞つて、僕が居ないので、不安に思つたのか、僕のところの方に探しに近寄つた時は僕は半ば、氣が付きかゝつてゐた。足音と、雑木にふれる音、鎌で棘をさる音、話し聲が近づいた。僕は死を装ふてうつ伏しに頭を岩角に片手を犬において息を凝らしてゐた。愈々近づいたと思ふた瞬間、頓狂な女の聲が金切聲で『誰か來て呉れ死んだと／＼』喚いた。ばた／＼逃出す音が聲の後に續いた。暫らくは物音がしなかつた。私は密しつと頭をあげた。人影もない、火は消へたらしい、反射で

明かつた一帯が、もう空の星から来る光の他は無いので眞暗闇だ。しやつ一枚猿股一つの身体が夜氣に觸れて今更の様に寒く、そして犬の屍が氣味惡くなつてきた。私は又近寄る足音をきいてうつ伏した。四、五人の足音がおそる／＼近寄つた。私を取巻いて立つてゐる様子だつた。

『犬を抱いてゐるな。犬に着物を被せてゐるばい。よつばど、苦しかつたらうな』『犬好きだつたな、逃げもせずに、ようおつたもんだい』『他の奴はどこさん逃げたらうか』……色んな話し聲が耳に入る。然し、後の懸合ひを恐れてか誰も手を出さない。隅で南無阿彌陀佛の聲がきこゑる。

村人は未だ歸つて來ん貴君達を逃げたと思つてゐたらしい。暫くして皆の人々が集つた。村長さんらしい人が『息があるかも知れん』といつてつか／＼私の傍に來て、いきなり私を抱きおこした。私は息を凝した、ある者が提へた提灯を顔にさしむけた。私の額から出る血、血で眞赤になつてゐる私の顔、如何に村人は戰慄したであらう。皆一度に、まあどか、わあどか感じてゐるらしかつた。女のすゝり泣きも聞ゐた。脈のあるのを見て人々は懸命に私をいたはり始めた。私は無理に息を凝した。村長さんは（皆が村長さんと云ふのでわかつた）五十過ぎた人だつたが、私の顔を知つてゐた。私の父はその時町長だつたから。彼は何を思つてゐたのか彼のこぼす涙が私の顔にかかつた。そして誰か急いで持つてきた酒徳利に入れた水を、村長さんは口にくんで私に吹きかけ始めた。

寒くて堪らんのに水をかけられては堪らん、僕は時分はよしと息を吹きかへす眞似をして『うーん』と云つた。村人は元氣づいて私の耳に口をあてて『おーい／＼』と喚きたてた。村長さんはその時は私を離して色々指圖をしてゐた。その代りに三十位の女がわたしを抱いてゐた。殆んど、裸の僕は女の温みとい

ふ物をしみぐゝ感じて、いゝ氣持がした。いつまでも勞れた身を、こうして抱いてゐて貰ひたい氣がした。死んだ母が、死にかゝつた臨終の僕を尋ね出して抱いてゐる、星は光る山は暗くて靜かだ、いつまでもこのまゝであれ、久しく求められなかつた母の体温が私を犬の子の様にふる／＼ふるへる私を、温めるじやないか、いつまでも／＼このまゝで……、僕は空想をその時は描かざるを得なかつた位詩的にすべてを感じたね。いゝ時がきた、私は目をあけた、村人たちを見廻した。村人達が、各々黙つて立つてゐて、ある人は、目の涙をぬぐつてゐる人もゐた。蘇返つた私を喜んでくれる涙だつたか、煙のため込みて出た涙だつたか、君わかつてゐるだらう……………」。

Kは追憶の糸を漁師の聲にさられた。潮が満ちてゐた。岩と磯との間は潮で斷たれた。漁師は『早く行かんと溺れる』と云つたのだつた。狼狽して潮を涉渡つた。

Kと私は再び海岸を傳つた。『それから』と私は彼に續きを求めた。

豫定通り僕は『火はどうなつたか……………』と斷れ／＼に聞いたんだ。村人は勿論圖に當つてひどく感動した模様だつた。

『ほんとに感心な……………』

『ぞこの人だらう』村長さんが、

『○○町の町長の息子さんだ』と云つた。村人達は各自何か話してゐた、僕のことを。勿論はめてね。

Kの話はそれから途切れ／＼になつた。私は彼の話しをそのまゝに記し得ない。大体次の様だつた。

その山はその寒村の唯一の殖林だつたこと、然し彼の嘘の犠牲の額の傷が村人達の憤りを柔げて同情に

代へたこと、それで僅小の償ひで示談となつたこと等だ。

村人達は、Kがひとり消火に努めて、火に追はれ、松に登り、松の枝の折れて落ち岩で額をうつて氣絶した事を、Kの叙述通りに恐らく一つの挿話として傳へるであらう。Kの額は傷けられて單純な村人は歎かれた。然しKは、Kの額が後悔の種となることはその時は思ひもしなかつたらう。Kは話題をかへて思ひ出した様に快活になつた。成程可愛想な程、彼の額は醜い、彼が悔むのも當り前だ。數奇な『嘘の犠牲』を彼は一生涯負ふて行くであらう。

山でKを抱いた女の人は村長の妹さんであつた。その人が、繼母であるとしてもKの今の母にならうとは恐らく山火事が無かつたら有得んことだらう。彼は額を氣にせんでもいい、嘘の行爲の犠牲は母のないう彼に心から彼を愛する珍らしい繼母を得さしめるまで人々を感動したでないか。嘘の犠牲は母の愛を捷ち得たのではないか。

數時間の後、その話も忘れたかの様に、Kと私はM港への小さい汽車に揺られてゐた。島原へく、そこには冬休に歸るKを待つ母親がゐるんだ。Kには父も死んだ。只山の女が母親に蘇み返へつて彼を狂愛する。山で抱かれた時の氣持はKに永久に残つて、山の母を慕はしむるであらう。

一九二三、一月。